

視線の哲学

知覚の理論としてのサルトルの他者論

柴田健志(鹿児島大学)

事物が「対象」として知覚されているということは自明のことであるように見える。しかし、事物がはじめから「対象」としてそこにあるとは考えられない。というのも、自我と外界との境界は乳児にとってはきわめて曖昧なものであると考えられるからである。事物が「対象」であることが自明なのは成人にとってであるにすぎない。では成人における「対象」の知覚はいったいどうやって成立するのであろうか。この問いかけに答えることを目的にして、発達心理学の知見を参照しながら「対象」知覚の哲学的なモデルを構成することがこの研究のねらいである。

そこで「対象」知覚においては他者の「視線」が重要な役割を果たしているという着眼にもとづいて、サルトルの「視線」の理論を「対象」知覚のモデルとして再解釈してみたい。

1

考察の出発点として発達心理学における「ジョイント・アテンション」という理論に注目しなければならない。「ジョイント・アテンション」とは、幼児が他者(大人)に向かって事物を指し示すときに形成される三項関係のことである。他者に向かって事物を指し示すという行為に、事物が「対象」として認知されているという点を読みとることができるはずである。

「ジョイント・アテンション」の理論は、幼児が他者という心的な存在を認知する発達段階に関する理論である。しかし、それを上記のように「対象」の知覚が成立する条件に関する理論として読み替えることができる。つまり、事物が「対象」として認識される条件を三項関係にもとめる理論として。この読み替えによれば、事物が「対象」として認識される条件は、他者の「視線」が事物に向けられていることの認知であると考えられることができる。

「ジョイント・アテンション」が観察されるのは健常児においては9ヶ月から18ヶ月の時期である(自閉症児においてはこれがあてはまらない)。それ以前には幼児は基本的に二項関係のなかで世界を認知していると考えられる。もちろん、この時期にも事物は知覚されている。しかし、それらの事物は知覚されている限りで存在を認められているにすぎない。この意味でそれらは幻想と区別できない。幻想とはそれが意識に現前しているあいだだけ存在を認められているようなものことである。それゆえ、成人における「対象」知覚の構造を考察するには三項関係をもとに考える必要がある。

2

ではなぜ他者の「視線」は「対象」を与えうるのであろうか。「対象」の概念には「私」の存在からは独立した存在であるという点が含意されている。しかし、ということは、「対象」とは現実に見えているものだけを指すのではない。むしろ「対象」とは知覚可能な存在という意味である。事実、「対象」とは「私」が見ていないあいだも存在していると想定できるものことである。「見る」ことができるという知覚可能性こそ

が、現実的に「見る」ことを成立させている条件でなければならないのである。「私」は知覚可能性のなかでのみ現実には何かを「見る」ことができる。

事物が「対象」として与えられるにはそれが「私」から分離されていなければならないが、その分離が遂行されるには知覚可能性の概念が必要である。もしそうでなければ「対象」はつねに「私」に現前していなければならない。しかし、つねに現前しているような「対象」はもはや「対象」とは認められないであろう。なぜならその場合には「対象」を「私」の存在から切り離すことができないからである。「私」と「対象」は合一してしまい、それらのあいだに区別を打ち立てることは無意味となるであろう。そこにはもはや「可能性」の概念は存在せずただ「必然性」のみが支配することになる。

では、知覚可能性の概念はいったいどこから与えられるのであろうか。他者の「視線」からであると答えることができる。つまり、他者の「視線」が事物に向けられることによって、「私」から「対象」が分離されるのである。

では、「対象」成立の起点である他者の「視線」それ自体はいったいどんなふうにして「私」に与えられるのであろうか。サルトルを参照しなければならないのはまさにこの点においてである。サルトルの論述ほど鮮明に「視線」の経験をとらえた哲学的分析はまずありえないと考えられるからである。

3

サルトルの他者論の特徴は、「私」が他者を見ることによってではなく、まったく逆に「私」が他者から見られることによって他者の存在が確認されるという点にある。しかし、「私」を見ている他者の「視線」は「私」だけを見ているのではない。当然のことながら、「私」はそれを世界に向けられうるものとして感じる。まさにその瞬間に、世界は「私」にとって知覚可能な「対象」として与えられるであろう。またここからふり返ってみれば、他者の「視線」にとって「私」もまた世界のなかのひとつの「対象」にすぎなかったことになる。このように、他者の存在が与えられることによって、「私」と世界との一体感は失われ、世界は「私」の存在から切り離される。と同時に、「私」と「私」自身との一体感もまた失われるのである。

他者の存在を感じたとき、世界は誰にでも「見る」ことのできる世界として「私」から分離されるであろう。ところが「私」もまた誰にでも「見る」ことのできる存在として「私」から分離される。他者の「視線」の効果によって、世界も「私」もすでに独立した存在としてそこにあるという「対象」の概念が成立するのである。

以上の考察の要点をまとめると次のようなことになる。乳児においては自我と事物が一種の癒合状態にあり、「対象」がまだ成立していない。しかし、こうした癒合状態は二項関係のなかでは解消されない。それゆえ、「対象」が成立するための条件として、自我と事物の二項関係に他者を加えた三項関係が要求されると考えられる。ひとことでいえば、自我と事物の癒合状態を解消するのは他者の「視線」にはかならない。他者の「視線」が知覚可能性という様相を世界に導き入れることによって、世界は自我から存在論的に分離され「対象」という位置に置かれるのである。